

武者小路實篤全集

武
步
金
集

学院图书馆
章



第十六卷

武者小路實篤全集 第十六卷

一九九〇年四月二〇日 初版第一刷発行

著者——武者小路實篤

発行者——相賀徹夫

発行所——小学館

一〇一〇一 東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号

振替 東京八二〇〇番

電話 編集 〇三—三〇—五二三四

業務 〇三—三〇—五三三三

販売 〇三—三〇—五七三九

印刷・製本——大日本印刷株式会社

用紙——三菱製紙株式会社

*著者検印は省略いたしました。
*造本には十分注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。
*本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目 次

真理先生

序

真理先生

馬鹿一・空想先生

彼の羨望

美人

兄弟

優しい心

馬鹿一

馬鹿一追加

不思議

今にやるぞ

山谷の結婚

書家泰山の夢（一幕）

ある島の話

天衣無縫

玄妙

拾ふ神

一

三

四

一一九

一二一

一二七

一三二

一三九

一四三

一五一

一五三

一五八

一六四

一七二

一七九

一八七

一九〇

一九四

悪魔の微笑	一九八
泰山の個展	二〇七
二老人	二一一
自然讃美者	二二〇
幸福な女	二三六
罪の子	二四四
一滴の涙	二五〇
仕合せな男	二五七
どつちが笑ふ	二六七
馬鹿一の夢	二七六
大愛	二八〇
泰山の結婚	二八五
美神とその忠僕	二九四
死んだ男	三〇三
空想先生	三一〇
馬鹿一万歳	三二七
自序	三一九
空想先生の話	三二〇

暴君と書家……………三二四

二人の画家の死……………三二八

白雲の病氣……………三三四

馬鹿一万歳……………三四〇

すべては過ぎ行く……………三四五

馬鹿一と病後の白雲……………三五〇

泰山の怒……………三五六

進化論者……………三五九

二正の鼠……………三六三

ある農家で……………三六六

山谷五兵衛……………三七一

序……………三七三

長篇 山谷五兵衛……………三七三

白雲先生……………四四一

白雲先生……………四四三

あとがき……………五四〇

馬鹿一の一生

五四一

自序

五四三

馬鹿一の一生

五四四

馬鹿一と或女 他二十二篇

五七三

馬鹿一と或女

五七五

死ねない男

五八一

戯曲 馬鹿一の笑ひ

五八四

一老人の肖像

五八九

石山先生の画

五九八

二老書家の対話

六〇四

仕合せな馬鹿

六〇九

馬鹿一の詩

六二四

無題 一人形よ 一 雑草(一) 一 雑草(二)

あとの人

六二六

涙

六三〇

馬鹿な噂

六三四

或る日の五兵衛

六三七

珍客来

六四一

二人の会話……………六四四

ある画から……………六四七

老いたる書家泰山……………六五三

のん気者……………六五九

或る男の気焰……………六六四

山谷五兵衛完敗……………六七七

三人の話……………六八六

有隣(短篇小説)……………六九五

平平凡凡……………七〇一

泰山「馬鹿」の三回忌に語る……………七〇八

「心」余録と雑感……………七一

余録……………七二三

この雑誌を出すことを話したら* この雑誌が出来るのが* 心を大いにほめて

くれ* 雑感 一新しき村の満三十年祭に就て 一 マーテルリンクが* 今度

久振りに* 「心」の休刊に就て* 「心」は長い間休んで* 生成会支部に

就いて 一 「心」を愛読する方が* こないだ二日許り* 志賀、柳、梅原達が

* 一 生成会支部に就て 一 性格有無 一 日日是好日と言ふ* 今度、弘前市や*

一 「心」は生成会の* 一心の同人は皆* 「心」も少しづつ* 長与が世界を

* 一 ルオーの個展を* 一 小宮豊隆君の* 一 芸術的神経 一 大原コレクシヨン 一

牟礼雑感 — 今度新潮社から * — 日本人は珍らしい国民で * — このつぎの「心」
の * — 「心」もいつのまにか * — 心の八月号の * — 今度の僕のは * — 死刑
廃止が * — 仙川の新居 — 五月の二十日の日曜日に * — 昨日、新聞を見て居たら
* — 「心」の百号発刊に際して — ピカソの映画を見て — 梅原、長与と僕の三
人展が * — 神に就て — ゴッホ展 — 協力 — 天災に思う — 偶感 — 前号の
福田君の挿画の * — 落ちついた気持 — 望みをおいている — 二人の死 — 偶
感 — こんど、僕としては * — この頃一番気にかゝるのは * — 今年の一月七日か
ら * — こないだある人が * — この頃人に逢うと * — 奥平英雄君から * — 今年も
やつと春めいて * — 「心」の発刊十五周年を迎えて — 或る日の雑感 — 時のた
つのは早い * — 自分の仕事 — 最近の気持 — 死に就いて — 近頃僕達が * — 自
分の健康法 — 雑録 — 現代作家自作朗読集 * — 僕は自分の味覚で * — 編輯後
記 — 僕は美術品を見るのが * — 「心」を出してから十八年になるとは * — 今の
多くの人は * — 日がたつのが早いのに * — 「心」を出した時は * — 自分は人
間は憐れな者だと * — 僕は一年程前に * — 僕が信用し * — 小宮君に死なれ * —
僕は他の人に比較して * — 僕はこの頃よく病気をする * — 「心」も出して二十年
近くなる * — 一九六七年がやつて来た * — 僕は去年の十一月十二月は * — 「心」
を出してから二十年になり * — 「心」の二十周年記念号は * — 「心」の二十年を
祝して * — 昨日テレビを見ていたら * — 僕は毎日少なくとも * — どんな人が居
ようと * — 僕は信用しない — 僕は信じている — 自分は死を考えても * — 私
は珍らしく病氣した * — 月が来、月が去るのが * — 今度「心」は * — 昨日電話
の聞きちがえで * — 「心」も来年は二十五周年に * — 「心」は皆の人の努力と *

一「志賀直哉全集」一巻を見て一「心」を出してから何年になるか*一僕は一年程前に*一十五行の原稿をかいてくれと*一私は八十九になり*一今朝、九時前に*

雑感(一).....七六三

巻頭言一滿一年を迎へて一信頼出来る人の本音一「心」の八十号を迎へて一「心」の十周年を迎へて一二十周年祝いの日に一「心」を一年の始めに

雑感(二).....七七一

一寸一言一白隠の画に就て一元氣一外国でやりたい二つの展覧会一前号の金冬心の「覺見三元」について*一理想国にしたい一働くことの喜び一作家と批評家一仙川随筆一仙川雑感一独言一画をかく時一自分の事一或る者達の對話一生甲斐のある道一雜記

解説・解題.....武者小路辰子.....七八九

真理先生



〔『真理先生』表紙。著者自装〕

序

愛読して下さった人が多かつたのは大いに感謝する次第である。
昭和二十六年一月

「真理先生」は僕の山谷物語をかき出した結果として生まれたものだ。又雑誌「心」があつて、僕に勝手なものをかゝしてくれた結果として生まれたもので、「心」と言ふ舞台がなければこの作品は生まれなかつたわけである。その代り何か他のものをかいてゐたかも知れない。「真理先生」は二ヶ年かゝつてかいたものだが、雑誌のメ切日に主にかいたもので二十二冊に分載されたので、大概一日か二日でかいたので、正味から言へば三十日あまりでかいたものだ。かゝない時も時々、今度はどう書こうかと頭の中では書いて消したりしたが、いよいよペンをとつてかいたのはメ切日か、その前日からかだつた。若い時は何かいゝ考が浮ぶと夜中でも飛び起きてかいたものだが、この頃は頭の内でかいたり消したりすることが平気になつた。しかしその間に大体次ぎの月にかく部分がはつ切りして来、ペンをとつても予定通りに、少しは出来不出来もあるが、仕事は進んだわけだ。始めは筋も何にもないものだつたが、三分の二位かいて段々筋がはつ切りして来たことは、いつもと同じである。

この小説の主人公は真理先生より寧ろ馬鹿一である。しかし思想的には真理先生が主人公であると思ふ。老人、それも特別な生活をしてゐるものが主人公で、若い人達は副になつてゐる、その点が今迄の僕の作と少しちがつてゐると思ふ。僕には一番かきいゝ方法をとつたが心をこめてかいた所もあると思ふ。出てくる人物は殆ど僕の分身であるが、僕の一面が誇張されてゐる所もあり、いくらか理想化されてゐる所もある。

この作は他の人にはあまり面白くないかと思つてゐたが、わりに

真理先生

一

之も山谷五兵衛の話。

僕は最近真理先生を知った。真理先生と言ふ人が居る事は僕は友達から随分前から知らされて居た。しかし僕は食はず嫌ひで、逢ひたいとは思はなかつた。どうも虫が好かなかつた。誇大妄想狂のようにも思はれたし、偽善者のようにも思はれたし、道学者の出来損ひのようにも思はれた。いつも真理真理と言つて真理を知つてゐるのは自分だけだと言ふ顔をしてゐるように思はれた。

処があつて見ると、極く真面目な男にはちがいないが、噂に聞いて想像したのとはまるで違つて、真剣な処のある男だ。僕の事だから相手がどの位、学問があるかないかは知らないが、ともかく僕の逢つた多くの優れた人間の内でも、一番精神力の強い男だと言ふことは一目でわかつた。之では多くの人に尊敬されるのも当然と思つた。身体は大きくない、体力は強いとは言へない。しかしへんに精神力を感じさせる顔だ。齢は六十を越してゐるだらう。僕は日本人が居ないとよく人から聞かされもし、自分でも言つてゐるが、もしかしたら、真理先生は、大物ではないかと思ふ。もしかしたらで

ある。僕にはまだはつ切りしたことは言へないのだ。

この真理先生は独身で、生活の方のことは全部弟子が世話をしてゐる。男の弟子や女の弟子が入れ交り世話をしてゐる。午前は先生から呼ばれた人だけが逢ひにゆく。その他の人には逢はないことに大体きめられてゐる。午後になると、いろいろの人が訪ねてゆく。そして先生にいろいろ質問をする。その質問に対して、傍で見てゐても氣持のいいようにびたりびたりと返事してゆく。先生自身は何にもかゝない。しかし先生の語つた言葉は弟子達が書いてゐるらしいが、まだ一つも本にはなつてゐない。

その答へぶりを一つ紹介して見よう。

「人を殺すことはどんな時でもよくないのですか」

「あなたが殺されていゝ時がありますか。あなたが殺されていゝ条件があれば、それを聞かして下さい。あなたがどんな時でも殺されるのがいやなら、少くもあなたは人殺しをしてはいけません」

「私を殺しに来た人はどうですか」

「その時にならないとわかりませんが、人を殺すものは自分が殺されていゝと言ふことを証明してゐる人間ですから、その時なら殺してもいゝでしょう。しかし恐らく、人殺しするものは、もつと簡単な動機で無考へに人を殺すのでしよう。つまり反省する力がないのです。教育されてない野蛮人なのです。だから教へる事が必要になるのです。他人を殺すものは自分を殺す権利を他人の手に与へる者だ。自分が殺されたくないものは他人を殺してはならない。自分が殺されたい人だけが、他人を殺していゝ人だ。しかしそんな人は他人を殺すような面倒をするよりは、先づ自己が殺されるがいゝ」

そう言ふ時、彼の心から火花が出るように感じられ、傍で聞いてゐてびりつとする。

彼は決してむづかしいことは言はない。しかし僕には反対出来ないことを言ふ。

或る人が「先生の考は実に平凡だ」と言つた。すると真理先生はすまして言つた。

「ありがたう」

その一言も聞いた時、ぴりつと胸に來た。

「僕はあたりまいの事切り言ひたくない。今の人はあたりまいのことを知らなすぎる。何でも一つひねくらないと承知しない。糸巻から糸を出すように喋るのでは我慢が出来ない。わざと糸をこんがらかして、その糸をほどく競争をしてゐるようなものだ。あたりまいでないことを尤もらしく言ふと、わけがわからないので感心する。こう言ふ人間が今は多すぎる。僕はそんな面倒なことをする興味は持つてゐない」

二

僕は或る時天皇に就てどうお考へになりますと聞いたら、
「愛してゐる。おしたい申してゐる。之は母の血だ。理屈ではなし」

と言つた。又或時かう言つた。

「日本全体の為、先きの先きまで考へることの出来ない人が多すぎる。あとは野となれ山となれと言ふ人が多い。暮打で言ふと、一手先か二手先切りわからないで、偉そうな顔をしてものを言ふ無責任者には時々腹が立つよ。日本人はもつと頭の根氣をよくしなければならぬ。一を知つて二を知らない人間が、尤もらしい顔して大いに喋る。それが民主的だと思つてゐる人が多い。もつと自分の言行

には徹底した責任が持てるよう、よく考へぬく習慣が必要だ」

或る時、僕はこう言つた。

「あなたは真理を愛するとおつしやつてゐるようですが、真理つてそんなにたよりになるものですか」

「真理以外にたよりになるものがありますか」

僕はそう怒鳴りつけられた。

「真理以外にたよりになるものはない。人間は皆死ぬものだ。暴力は誰でも殺し得るものだ。だが真理は殺されない。最後の勝利は真理が得る。キリストは神の子だから僕は尊敬するのではない。又キリストが十字架を荷つたから尊敬するのではない。真理以外のことを言はなかつたから尊敬するのだ。真理だけが死なない。又僕は心から頭をさげるのは真理だけだ」

「愛とか美とかはどうなのです」

「愛と美も真理に背かない時、限りなく美しい。真理にそむけば、その愛と美を僕は讚美出来ない。しかし愛と美に真理以上のものがあることを僕は認める。それ以上、愛と美を真心を持つて愛することが、真理だと言へる。真理は、人類全体が天国に入れる道を示すものに他ならないのです」

僕には真理先生の言ふことが何処まで本当か知らないが、反対する氣がせず、聞いてゐると、何となく明るい氣になるのだ。

僕は或る時真理先生に、馬鹿一の話をした。すると真理先生は、大いに興味を持つて是非見に行きたいと言ふのだ。

それで僕は、大いに興味を持つて真理先生を馬鹿一の処につれていった。

三

馬鹿一に真理先生が君の画を見たいと言ふのでつれて来たと言つたら大喜びで画を出して見せた。真理先生も始めはあまりに幼稚な画で驚いたらしいが、熱心に見た。長い沈黙のあとで、

「感心しました」と言つた。馬鹿一はそれまで黙つて神妙にしてゐたが、そう言はれると飛び上るように喜んで言つた。

「本当ですか」

「本当です。僕には画のことはわかりませんが、僕は今迄にこんなに誠実無比な画を見たことはありません。実によく見てかいてある。しかも実に愛してかいてある。それ以上実に尊敬してかいてある。誰もこう言ふ雑草や石をこんなに愛することは出来ないでしょう」

すると馬鹿一は

「ありがたう。ありがたう」と言つて泣き出した。

そして今迄かいた何百枚と言ふ、石や雑草をかいた画を持ち出して来た。

之にはさすがの真理先生も閉口したことを思つた。

「よくもかいたものですね」

真理先生は微笑をうかつてそれを丁寧に見出したが、三四十枚見たらさすがに参つたらしく、

「もう見るのがくたびれました。今度又ゆつくり見せて戴きましよう。人が来て待つてゐますから、今日は之で失礼します。だが実に感心しました。今の日本にあなたのような人が居ると思ふと、嬉しくなります」

真理先生はそう言つた。帰りに真理先生は言つた。

「驚いたね。聞きしに優ると言ふ言葉が自づと浮んで来る。日本も小さい国だが、知れば知る程面白い人があるね」

「先生は本当に馬鹿一の画に感心なさつたのですか」

「感心しました。僕は画のことはわかりませんが、あの本気さと、石や草を神のつくつたものゝように尊敬してかいてゐるのに感心しました。あの画なら僕の室にもかけておきたいと思ひました。それにあの真剣さと、勉強はどうです。それに実に正直によく見てゐます。感心しない訳にはゆきません。たしかに少し変な処がありますが、僕は喜んであの男には頭を下げますよ」

「一つ画をもらつて上げましょうか」

さすがの真理先生もすぐこれと言はなかつた。

「くれと言つたら、どしどしくれそうですね。一つか二つなら喜んでもらいますが、それ以上は僕はほしくないので。僕はあの世界に自分が入り込まうと思ひませんからね。それに粗末にしてはわるいから」

「本当にうつかりほめたら、後が大変です。どんどんくれますよ」

二人は笑つた。

「だが日本にも中々いゝ人が居る事を、御かげで知つて、嬉しく思ひましたよ」

四

僕は真理先生が好きになつた。それで午後になくよく出かけた。行けば何か教はることがあるように思つた。又彼の処に出入りする人間は、実に善良な人許りで、誰にも好意が持てた。勿論この世ではあまり成功しさうもない人が多かつた。